

なんでも **アリ** の国 イギリス

なんでも **ダメ** の国 ニッポン

山形優子フットマン

Yuko Yamagata Footman



講談





講談社文庫

常州大学図書館

なんでも蔵書なんでも蔵書
イギリスの国ヨーロッパ

山形優子フットマン

講談社

著者 | 山形優子フットマン 上智大学文学部社会学科卒業。カリフォルニア州立大学ヒューマニスティック心理学修士（ロータリー財団奨学生）。新聞記者を経てフリーライターに。在英30年。イギリス人男性と結婚、3人の娘の母。著作に「憧れのイングリッシュガーデンの暮らし」（エディション・ドウ・パリ）がある。

なんでもアリの国イギリス なんでもダメの国ニッポン

山形優子フットマン

© Yuko Yamagata Footman 2013



講談社文庫

定価はカバーに表示してあります

2013年4月12日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——慶昌堂印刷株式会社

印刷——慶昌堂印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277508-3

はじめに 4

第1章 不潔で大雑把が英国人の基本!? 7

第2章 日本と英国、入院するならどっち? 37

第3章 暴動の国から「地震の時、日本はすごい」? 61

第4章 子育ての目標は、親も子も「自立」 81

第5章 女性が夢を実現できる国 105

第6章 「日本難民」だって、生きていける！……………123

第7章 いまも生きてる“騎士道”と瀕死の“武士道”……………145

第8章 英国の女性に盲点あり？……………173

第9章 英国って実は世界の植民地？……………201

第10章 死ぬときも「あつさり」が英国流……………221

あとがき……………242



講談社文庫

なんでもアリの国イギリス なんでもダメの国ニッポン

山形優子 フットマン

講談社

はじめに 4

第1章 不潔で大雑把が英国人の基本!? 7

第2章 日本と英国、入院するならどっち? 37

第3章 暴動の国から「地震の時、日本はすごい」? 61

第4章 子育ての目標は、親も子も「自立」 81

第5章 女性が夢を実現できる国 105

第6章 「日本難民」だって、生きていける！……………123

第7章 いまも生きてる“騎士道”と瀕死の“武士道”……………145

第8章 英国の女性に盲点あり？……………173

第9章 英国って実は世界の植民地？……………201

第10章 死ぬときも「あつさり」が英国流……………221

あとがき……………242

はじめに

このおばさま、つまり私が若かつた頃のこと。

アメリカ西海岸で心理学のマスターを修めた後、残った資金でイギリス旅行に出た。一日15ドルというバジェットを念頭に、シアトルで買った大きなラックサックにすべてを詰め込み、英国航空に乗り込んだ。男性C Aが「ウツジュー・ライク・ティ―・オア・コーヒー？」（紅茶にいたしますか、それともコーヒーになさいますか）と美しい本物の英語で訊いてきたから驚いた。西海岸では「ワジュワン、ティ、カフイ？」、同じ英語でもこうも違うか。

英国式に惚れ惚れも束の間。ヒースロー空港で私の荷物が紛失！ いや、同じ色型のはあつたが、誰かが間違つて私のを持って行つたらしく、中からは男物が。

もう、がつくり。観光どころか安宿のぼろベッドに潜り込んだが眠れない。と、「何かあつたらここへ」と友だちがくれた英国紳士？ の連絡先を思い出した。公衆

電話（当時携帯電話はなかった）から連絡したが不在。あきらめず1時間おきにダイヤルを回し、やっと夜の10時過ぎにつながった。

「いやあ、すまなかった。今、帰って来たところだ。それは大変！　よかったら明日我が家へどうぞ」

美しい本物の英語が惨めな心に沁み入った。翌日、ひよつとしたらと空港に戻る、なんと私の荷物が私を待っていた。それを背負い、彼が指定した、テニスで有名なウインブルドン駅へ。「素敵な白馬の騎士だといいな」なんてことは思ったかも。

駅前で初めて出会った赤毛の「騎士」は意外にも普通。

「コリンです」と名乗った時、思わず小説『秘密の花園』の我が儘少年コリンを思い浮かべてしまった。まさか、この人と結婚するとは思わなかった。

あれから三十余年、今もウインブルドンに住む。人から馴れ初めを聞かれると夫はかならず、私に「駅でひっかけられた」と被害者を装う。

思えば、あの遠い夏の日、私は一日にして、紛失した荷物と将来の旦那とを見つけ た。そう、あの日は、他人様にはガラクタに見えても、私にはかけがえのない、自分 にか持てない本物の荷物——つまり「自分らしい人生」を、やっと手にした記念日 だったのだ。

人は一生をかけて、自分なりのお荷物を背負って歩き続けるものだ。その荷の、ほんの一部をひもといて記したのがこの本だ。考えさせられることには事欠かない刺激的な人生だった。泣いた日もあつたし笑いころげた日もあつた。これからもそんなふうな日々だろう。

私の「秘密の花園」の名はイギリス。その日の風向きがどうであろうと、いつも私を鷹揚おうえうに包みこんでくれる。花園の主であるコリンは、私を支え続けてくれる。ありがとうイギリス、ありがとうコリン。

第1章

不潔で大雑把が
英国人の基本!?

ゴミ「垂れ落とし」

英国は紳士の国だから、英国人のパブリック・マナーは、さぞかしよいだろうと思うかもしれないけれど、それがそうでもない。

一番の問題はゴミ。ゴミ箱に入れないで、「ゴミの垂れ落とし」状態をやつてのける。

先日、ロンドン南にあるロイヤル・アルバート・ホールに、クラシック音楽コンサートを聴きにいった。帰りの地下鉄の中、一見正常な英国人の初老の夫婦と一緒にいった。奥さんはショートヘアに素敵なロングのコート、ちよつとかわいいイヤリングという出で立ちの典型的ミドルクラス。同じプログラムを手につけていたから、コンサート帰りに間違いない。

でも、この奥さん、マナーがなっていない。バナナを食べながら電車に乗り込んだ。それだけでもちよつと驚いちゃうのだが、その後、もつと驚くことをした。彼女はバナナを食べ終わると皮をそのまま、ぽーんと車両の床に捨てた。バナナの皮は、重力に抵抗することなく、ぐんにやりと電車の床に落とされたままとなった。ご主人

は、そんな奥さんの仕草には目も留め^とない。二人で何やら話しながら、プログラムを覗^{のぞ}き込んでいる。

私は思わずバナナの皮と彼女の品のある顔を何度も何度も見比べてしまった。そんな私の視線に、奥さんはまったく気づかないまま。これが、日本人だったら、おしゃれな格好をしている時、それも、いい年をした婦人が公共の場でバナナなんかモリモリ食べない。仮に食べたとしても、さすがにゴミである皮はバッグに入れて持ち帰るだろう。

しつけがなくても、公共の場では他人の目ぐらい、たまには気を配るべきだ。

正常な婦人でさえそうなのだから、ちよつとしたチンピラくんたちは年中そんなことをやらかしている。アイスクャンデーの紙袋、マクドナルドを食べた後のゴミ等々、口に入れたと思ったら、後は路上にポイポイと「垂れ落とし」。

だから英国人って、言ってみればゴミと同居している。

たいていの駅にはゴミ箱がない。これはなぜかというと、長い間の北アイルランドとの相克が原因。つまり、テロリストが駅のゴミ箱の中に爆弾をしかけたりするか

ら。IRAとの問題はいちおう改善しても、英国はイラクなどの中東問題やアフガニスタン問題を抱えている参戦国、だからイスラム系のテロには予断を許さない。

「風が吹けば桶屋がもうかる」式に、「テロがあるから清掃員は大忙し」なのかも。

英国伝統ピクニックのマナーでは「出たゴミはかならず持つて帰る」というのが正統派だ。今でも健全な家庭の人たちのピクニックの後は「立つ鳥、跡を濁さず」式にきれい。

だが、街で出たゴミを持つて帰ろうなどという発想は、ほとんどの人が持ち合わせていないのではないか。駅の構内では飲み終わったカップチーノ用の紙コップがベンチの上にくつも並んで置いてある。電車やバスの中では飲み物が入っていた瓶とか缶などが座席の下に捨てられるので、揺れるたびに瓶などが、ゴロゴロと転がり、しかも空じゃないから、あちこちに液体をまき散らしながら車内を汚していく。それを、のろのろした清掃員が一人で時々、回収に来る。

座席にゴミを残していく人も多い。読み終わったフリーペーパーが空席や座席の下にポイと置いてあることも。もつとも、このペーパーはリサイクルされる。駅ごとに入って来る乗客たちは、誰かが置いていったペーパーをわしづかみにし、下車駅に着くまで読みあさる。そしてまた、席に置きざりにして下車していく。わざわざ買った

その日の新聞を「他の人たちのために残していつてあげる」親切なサラリーマンたちもいるから感動ものだ。

駅では「誰のものかわからない荷物があつたら触らずに、すぐに通報してください」と、時々アナウンスがある。爆弾の危険性があるからだ。ちよつと輦^{ひんしゆく}感をかうかもしれないが、万が一私がテロリストだったら、駅に爆弾なんかしかけない。フリーペーパーに、毒とか黴菌^{ばいきん}でも振りかけておけば、どんどんそれに感染して、駅ごとにバタバタと倒れる人が続出すること間違いなし。

それぐらい英国人つて意外に、あさましい。

古色豊かなウィンブルドン村のはずれに暮らして30年になる。家を一步出れば、広大な自然保護地区ウィンブルドン・コモンの緑と森が延々と隣接地区の向こうまで続く。夏になると家の近くの広場は人々の憩いの場となり、陽が暮れても楽しそうな笑い声が絶えない。

でも、最近ちよつとした問題が発生。若者たちがインターネットで声を掛けあつたから、100人近くが広場に集まつてしまった。人々の笑い声はハチの巣をつついたような騒音となり、それが夜更^{よふ}けまで続いた。

次の朝、用事があつて外に出て驚いた。美しい緑の芝生は、野外ロックコンサートの後みたい、ゴミの山に変身していた。集まった若者たち一人一人が、ゴミの「垂れ落とし」をしたらしい。いまだかつてコモンがこんなに汚されていたのを見たことはなかった。すでに市の清掃局の職員さんたちが数人、繰り出していたが、その彼らでさえゴミの量に圧倒され、しばし呆然^{ぼうぜん}と立ち尽くしているだけだった。もつとも約2時間後には、すべてのゴミが処理されて、もとの美しいコモンの姿に戻っていたが。

英国人と日本人の「清掃」に関する考え方には雲泥の差がある。英国人は公共の場における清掃は階級の低い人のする仕事のように思っている。

これって、もしかしたら階級制度がもたらす落とし穴かもしれない。階級制度の根底には「I am better than you.」というプライドがとぐろを巻いている。上流もミドルも労働者階級も勝手に「自分が一番」と思っている。だから、専門職でない限り、掃除なんかしたら汚券^{こけん}にかかわると思っている。

日本で駅員さんが、自然な仕草でゴミを拾う姿を見かける時がある。小さな駅だったら、今でも駅員さんじきじきに毎朝、心を込めて駅の掃除をするだろう。駅員さん